イレギュラーな勇者様

CITY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イレギュラーな勇者様

【Ｎコード】
Ｎ６６０７Ｌ

【作者名】
ＣＩＴＹ

【あらすじ】
いつものつまらない日々、いつもと変わらない明日、いつものままの自分。ごく普通（？）に、暮らしていただけなのに突然異世界に…。えっ？　勇者の数がおかしい？　すみません、多分私です。手違いで召還された主人公、そして彼はその世界で何を望む！
１１／７　編集

プロローグ　悪友編（前書き）

プロローグが長いので、ここで二つに分けます。
次はヒロイン編の予定です。

プロローグ　悪友編

主人公　ｓｉｄｅ

ドガッ　バキッ　ボコッ　グシャッ

目の前には正義の味方達（お人好し）に戦いを挑んで、無惨にも敗れた悪者（不良）が転がっている。

いい加減に見飽きてきた光景を前に、私は事後処理（倒れている不良へスタンガンを入れている）をしている。

えっ？　卑怯？

とんでもない。

勝負を挑んできたのは向こうだから無問題。

「ハァッ！」　ドン！

どうやら向こうは勝負がついたみたいですね。

私もさっさと終わらせますか。

「お～い。刹那～。まだか～？」

遠くで茶色の髪をした青年の声がします。

……自分でやった喧嘩（虐殺）くらい自分で処理して下さい。

彼の名は『立椿　紅』

私の悪友の一人です。

茶髪黒眼で渾名は『体力バカ』、これ以上ぴったりな言葉は存在しません。

文字通り運動神経はピカ一だけど、勉強が壊滅的。

サバイバル部に所属。

せっかくの顔を己の行動とエロ発言により尽く台無しにしています。

「いつもすまない。刹那」

今度はその隣にいる金髪の方がすまなそうに言ってきました。

そう言う位なら、初めからやらないで下さい。

彼の名は『西園寺　光』

私のもう一人の悪友です。

金髪碧眼で渾名は『フラグメーカー』

生徒会長&剣道部員で才色兼備、頭脳明晰、容姿端麗、運動神経抜群、品行方正、主人公補正所持

正義感が人一倍強く、不良に絡まれた女性をよく助け、フラグを乱立している。

本人は無自覚だから性質が悪い。

さっきの不良との喧嘩は光が絡まれている女の子を見つけて、そしてｆｉｇｈｔ。

そして、また新たなフラグが…。

フラグを立てるのは良いけど、私を巻き込まないでほしい。

えっ？　どうして巻き込まれるかって？

理由は　光がフラグを乱立する　↓　女性たちが光に近ずくため私に好みなどを聞いてくる（紅は最初から当てにされない）　↓　喧嘩が起きないようにするため、機会を平等に与えなくてはならない。

↓　私に白羽の矢が…

というわけです。

最後に私『白亜　刹那』

黒髪黒眼でいつも眼鏡かけています。

髪の長さは腰くらいまであり、後ろ姿はパッと見女の子。

いつもヘヤゴムを下の方で括っている。

けど、存在感が薄く、誰も気にしないし、校則違反ではないので誰も気にしない。

成績も運動神経も中の上で帰宅部に所属（？）

クラス内での評価は「ハクア　セツナ？　ああっ。光と紅と一緒にいる地味な奴ね」

近所からは「色々手伝いをしてくれる良い子」

ま、以上ですね。

本当はもっとあるんですが…

「刹那～。早くしないとＨＲ始まっちまうぞ」

時間がないのでここまでにします。

「今行きますよ」

そう言うと私達は学校に向けて、走り始めました。

「なぁ、光。今日は何人に告白されたんだ？」

「えっと…。５人…」

「くそう。何で光ばっかりもてて俺はもてないんだ…」

『その性格のせいだ（です）』

時は変わって放課後。

えっ？　内容を飛ばしすぎだ？

いやいや、どうせ一回しか登場しない人たちを書いても意味ないでしょう。

（全校生徒『おい！』）

ま、ここまでの事を簡潔にまとめると

？　何とか学校に間に合う

←

？　授業が始まり、それと同時に紅が夢の中に…

←

？　昼休みに光の周りがカオスなことになり、起きた紅と一緒に避難

←

？　？の繰り返し

←

？　学校が終わり光が屋上ｅｔｃ…に呼ばれる

←

？　そして現在に

まあ、細かいところはお察し下さい。

そして今、サバイバル部と剣道部が休みなので3人で生徒会室に向かっています。

関係ない私と紅が行くのはいつもの事なので、気にしたら負けです。

これから行く先が一番の魔境なのですから。

プロローグ　悪友編（後書き）

評価・感想　お待ちしています。

プロローグ　ヒロイン編（前書き）

それでは、後半どうぞ。

プロローグ　ヒロイン編

刹那　side

さて、今は生徒会室前にいるわけですが…。

「刹那か紅、扉をあけてくれ」

『丁重にお断りします』

只今、揉めております。

『扉を開けるくらいで揉めるな』と思った人、直ぐに分かりますよ…。

何で全員扉を開けたがらないのかが。

「ここはやっぱり、光が…」

「いや、刹那が…」

「私に死ねと言うのですか？」

「じゃあ、紅。君に任せた」

「断る」

このままでは終わりませんね…。

仕方がありません。　バカを使いますか…。

「紅、よく聞いてください」

「なんだ、刹那。俺は嫌だからな」

「本当にそれでいいのですか？」

「なに？」

「今、この扉の向こうには恐らく5人の美少女達がいます。

このなかで、デッドカードは翠と夢の2人。

5枚のカードのうち3枚の安全なカードを引く確率は3／5、半分以上です」

「おおっ！」

「あなたはここで、じっとしているつもりですか？」

「俺…やってみる！」

そう言うと紅は扉に手をかけた。

「刹那、人を騙すのは良くないぞ」

光が紅に気付かれない様に小声で話しかけてくるので、こちらも小声で返す。

「騙すとは人聞きが悪いですね。

それに、私は一度も嘘をついてませんよ」

前の私の発言をよく見てください。

安全なのはカードの場合だけで現実が違うだけです。

「頼む、あたりであってくれ」

そう言うと、紅はおもいっきり扉を開けた。

「光〜に〜」

という掛け声と同時に『何か』が紅の腹に突っ込んできた。

「がっ！」

鳩尾に入ったのか、腹を押さえて床に蹲っている。

さらば、お前の事は忘れない…

「俺はまだ、死んじゃいない！」

そう叫ぶと同時に起き上がる。

ギャグだとすぐに復活するんですよね…さすがボケ役。

うたれ強さは人一倍です。

「廊下でうるさくしたらいけないんだよ」

…あなたがそれを言いますか。

彼女の名前は『西園寺　夢』

光の妹で極度のブラコン。

本人曰く、『２４時間に一回は光兄に抱きつかないと電池切れになっちゃう』

妹と言っても光と同じ学年で、光は４月生まれで夢は１月生まれ。

金髪碧眼で髪をツインテールにして肩の上まで伸ばしてます。

かわいい容姿をしていて、活発な性格です。

運動神経も成績も上の中ぐらい。

若干、天然が入っている可哀想な子です。

周りからは、同級生なのに『夢ちゃん』と呼ばれています。（一部を除く）

「おい夢、うるさいぞ」

生徒会室からまた別の女の子が出て来た。

彼女は『九十九　蓮花』

古くから伝わる由緒正しい九十九家の一人娘。

代々家に伝わる九十九流剣術の次期当主…だそうです。

そのためか剣道部に所属しています。

また、生徒会の庶務係にもなっています。

『剣道』では光と五分五分だが、『剣術』では蓮花の圧勝。

黒眼黒髪で髪を頭のてっぺんでポニーテールにしています。　目が若干釣り眼。

真直ぐな性格の持ち主です。

成績は…紅よりは勝っている、以上（本人のためここまで）。

「は～い、光兄も入ろう」」

そう言うと、夢ちゃんは光を連れて何事もなかったように生徒会室

に入って行った。

「誰も構ってくれないくれない…」

「早く入りますよ、紅」

「ああっ…」

紅が項垂れていますが、いつもの事なので気にしません。

降りかかってくる火の粉は、降ってくる前に逃げておくべきなのです。

さて、他のメンバーは…全員いますね。

「光〜。来るのが遅かったじゃない」

「悪い。翠」

生徒会室で書類整理している女の子が、光が入ってくるなり文句を言ってきた。

彼女の名前は『立椿　翠』

紅の双子の姉で生徒会副会長

紅とは正反対で運動神経こそないが成績は光に続いて2番目（ほぼ二人で１００点を取り合っている）

茶髪黒眼でウェーブのかかった髪を腰のあたりまで伸ばしています。

グラマスな体系をしていて、いつも光に積極的にアピールしています。

しかし、紅曰く、怖がりでお化けとかが苦手らしい。

尚、その話をしている最中に翠に見つかり、紅が『般若を見た』と言っていました。

「翠ちゃん、光さんたちだって予定があるわけだし…」

「なに言ってんの、里緒。　こういうのはビシッと言ってやんないと」

里緒と呼ばれた女の子が翠に言い押されている。

『十六夜　里緒』

翠の親友で生徒会書記。

成績は常に上位クラスで弓道部の期待のエース。

しかし、他の運動は平均以下。

黒眼黒髪で眼鏡っ子。　髪を左右に三つ編みにしています。

胸が大きいのでよく不良に絡まれます。

まあ、その度に光たちが助けているんですが…。

「まあまあ、翠さん落ち着いて下さい」

「だって～」

早く光に会いたいのも分かりますが、駄々を捏ねないで下さい

「兄さんたちも早く来て下さい」

「分かった」

さっきから仲裁役をしている子は『白亜　沙織』

私の義理の妹で、生徒会会計係です。

親は小さい時に交通事故で亡くなって、親戚である私の家が引き取りました。

黒眼黒髪で髪をストレートにして腰の辺りまで伸ばしています。

成績も運動も学年三位（一位、二位があれだから）で男子からの人気も高い私の自慢の義妹です。

夢ちゃんとは一応、親友（？）の関係だそうです。

以上の男子３人、女子５人がいつものメンバーです。

ちなみに、生徒会会長選挙は１０月、今は１１月なので高一の光達でも生徒会長になれます。

（この偉業を達成したのは、この学校５０年の間で、光で３人目で

す）

「そう言えば俺、昨日変な夢見たんだよな」

「紅も？　実は俺もなんだよ」

「あたしも～」

「私も…」

「あら、みんなも？」

「『みんなも』ってことは翠ちゃんも？」

「そう言う里緒こそ」

「実は私もです」

みんなそろって変な夢を見るとは…些か妙ですね。

「兄さんは見なかったのですか？」

「ええ」

「そうですか…」

なぜ、沙織はそこでがっかりするのですか？
それにしても最後に夢を見たのは何時でしたっけ？

「皆さんはどういう夢を見たのですか」

「見たというか…」

「声だけが聞こえてきたんだ」

「私も、その声、女の人の声だったよ」

「夢もか」

「蓮花も！」

「私もなんだけど、なんか呼ばれているような感じがして…」

「そして、気が付いたら目が覚めてました」

「私も同じ内容です」

内容まで一緒とは、これは…。

「俺たち『も』異世界に召喚されたりしてな」

紅が有り得ない様な事を言いだしたが、みんなは否定せずにただ考え込んでいた。

『異世界召喚』この言葉は１０年前に全世界の人に知れ渡った。

その原因は『第一次召喚多発事件』と呼ばれる、全世界で１０００人の失踪事件であった。

最初はテロリストのせいと警察は思っていたが、その３日後失踪したと思われた人の内６０００人が帰ってきて『自分は異世界に言ってきた』と言いだした。

最初は警察も『テロリストによる催眠術』のせいだと思っていたが、証拠を見せられ認めざる負えなくなってしまった。

その一つが『魔法』である。

世界連合はこの事態を認め、急いでその対策を立てた。

それは『ＳＰＫＯ』『召喚者治安維持組織』である。

これは召喚者の『魔法』という理不尽で絶対的な力から一般市民を守るための組織である。

なにせ召喚者一人の『魔法』は戦闘機十数機分に値するのである。

つまり、目には目を、歯に歯はを、召喚者には召喚者をである。

しかし、召喚は今も尚続いていて（１００人／年）政府はその始末で大忙しである。

召喚者一人の『魔法』は戦闘機十数機分に値するのであるから、各国は召喚者の力が欲しいから結界なんて張るわけはなく、強い召喚者が現れるのを待っているのである。

話が逸れるけど『召喚者』でわなくて『被召喚者』の方が正しいと思う。

まあ、この話は置いといて、もし光たちが異世界に行くとなると豪いことになるな…主に女子たちが。

「そういえばだけど…」

「どうしたんだ、刹那？」

「マットの模様が変わってると思ったら魔法陣だったんですね」

『えっ？』

みんなが下を向くとそこには薄く光っている大きな丸い幾何学模様が…。

『そういうことは早く言え～』

そう言うと刹那以外の7人が薄くなっていく。

（はあ、厄介事は御免なんですけどね）

そう思いつつ隣の沙織の顔を見てみると…

（はあっ）

いかにも不安げな表情で自分の体が消えているのをただ眺めていた。

（仕方がありませんね）

「待って下さい」

そう言うと、私は沙織の手をとり…

『ヒュンッ』

異世界に飛ばされたのだった。

プロローグ　ヒロイン編（後書き）

５人のヒロインのうち、４人は光のことが好きです

登場人物紹介　ｐａｒｔ　１（前書き）

ここでキャラクターの紹介を

登場人物紹介　ｐａｒｔ　１

『白亜　刹那』年齢：１６歳　身長：１７０ｃｍ　体重：７２ｋｇ

黒髪黒眼で長い髪を後ろの方で括って、いつも眼鏡かけている

基本的に敬語で話をする

成績も運動神経も中の上で帰宅部に所属

クラス内での評価は「ハクア　セツナ？　ああっ。光と紅と一緒にいる地味な奴ね」

近所からは「色々手伝いをしてくれる良い子」

優秀な妹を持つせいで、親からは落ちこぼれ扱いされている

しかし本人は気にしていない

『西園寺　光』年齢：１６歳　身長：１７２ｃｍ　体重：７５ｋｇ

主人公の悪友

金髪碧眼で渾名は『フラグメーカー』

生徒会長＆剣道部員で才色兼備、頭脳明晰、容姿端麗、運動神経抜群、品行方正、主人公補正所持

１００人中９９人の女子が振り返るイケメン（残りの１人は百合の場合）

スポーツテストは学校内１位、全国模試も毎年１位の化け物

正義感が人一倍強く、不良に絡まれた女性をよく助け、フラグを乱立している

本人は無自覚だから性質が悪い

不良に絡まれている女の子を見つけては、ｆｉｇｈｔ

そして、また新たなフラグが…

実際問題、刹那よりも王道の主人公の感じがする

周りの人の評価　：『白馬の王子様』
主人公の評化　　：『ただのお人好し』
主人公への評価　：『頼りになる奴』

『立椿　紅』年齢：１６歳　身長：１７３ｃｍ　体重：７８ｋｇ
主人公の悪友の一人で、立椿　翠の双子の弟。
見た目の割にはそれなりに引き締まっている筋肉を持ってる
茶髪黒眼で、１００人中６０人の女子が振り返りそうなイケメン
渾名は『体力バカ』、これ以上ぴったりな言葉は存在しない…

運動神経は去年のスポーツテストが学校内2位、学力が…下の下の下

また、彼の日常生活の中でもそれが伺える

せっかくの顔を己の行動とエロ発言により尽く台無しにしている

サバイバル部に所属していて、第六感が変に発達している

とある事がきっかけで刹那の秘密を知り、それ以来誰にも言わずに秘密にしている

そのため刹那は紅のことを一番信用している

周りの人の評価　：『お調子者』

主人公の評化　　：『いざという時は頼りになる奴』

主人公への評価　：『？？？』

『白亜　沙織』年齢：１５歳　身長：１６１ｃｍ　体重：???
バスト：Ｄ

刹那の義理の妹で、生徒会会計係

親は小さい時に交通事故で亡くなって、親戚である白亜家が引き取った

黒眼黒髪で髪をストレートにして腰の辺りまで伸ばしている

成績も運動も学年三位（一位、二位があれだから）で男子からの人気も高い

そのため、刹那の両親は刹那よりも沙織の方を可愛がっており、そのせいで兄の迷惑になっているんじゃないかと思っている
（しかし、刹那は両親の事が嫌いなのでちょうどいいと思っている）

秘かに兄に想いをよせている（ブラコン）

夢からは『同類の匂いがする』ということで、色々愚痴を聞かされている

周りの人の評価　：『お嫁さんにしたい』

主人公の評化　　：『自慢の妹です』

主人公への評価　：『（血が繋がってないから法律上、結婚できますよね）』

『西園寺　夢』年齢：１５歳　身長：１５５ｃｍ　体重：???

バスト：Ａ

光の妹で極度のブラコン

本人曰く、『２４時間に一回は光兄に抱きつかないと電池切れになっちゃう』

妹と言っても光と同じ学年で、光が４月生まれで夢が１月生まれ

金髪碧眼で髪をツインテールにして肩の上まで伸ばしている

かわいい容姿をしていて、活発な性格

秘かに身長と胸がないのをコンプレックスに抱えている

運動神経も成績も上の中ぐらい

若干、天然が入っている可哀想な子

周りからは、同級生なのに『夢ちゃん』と呼ばれている（一部を除く）

周りの人の評価　：『明るく元気な子』

主人公の評化　　：『兄妹での近親相姦は日本では結婚できません（妹にまでフラグを立てないで下さい）』

主人公への評価　：『光兄のサポートよろしく』

『立椿　翠』年齢：１６歳　身長：１６８ｃｍ　体重：???
バスト：Ｄ

紅の双子の姉で生徒会副会長で
紅とは正反対で運動神経こそないが成績は光に続いて２番目（ほぼ二人で１００点を取り合っている）
茶髪黒眼でウェーブのかかった髪を腰のあたりまで伸ばしている
グラマスな体系をしていて、いつも光に積極的にアピールしている
しかし、実は甘えん坊で怖がりでお化けとかが苦手
一人でいると、すごく不安になるがいつも明るく振る舞っている

周りの人の評価　：『紅と血が繋がっているとは思えない』
主人公の評化　　：『ああ見えて、実はしっかりしている』
主人公への評価　：『意外と気配りが上手』

『九十九　蓮花』年齢：１５歳　身長：１６７ｃｍ　体重：？？？　バスト：Ｂ

古くから伝わる由緒正しい九十九家の一人娘

代々家に伝わる九十九流剣術の次期当主

そのためか剣道部に所属して、常に木刀を携帯している（学校側の許可はとってある）

また、光の剣道を練習している姿に惚れ、生徒会の庶務係にもなっている

『剣道』では光と五分五分だが、『剣術』では蓮花の圧勝

黒眼黒髪で髪を頭のてっぺんでポニーテールにしている　目が若干釣り眼

真直ぐな性格だが、いざという時に勇気が出ず光に告白しそびれている

成績は…紅よりは勝っている、以上（本人のためここまで）

周りの人の評価　：『可愛いけど、近寄れない』

主人公の評化　　：『学校にまで木刀を持って来ないで下さい』

主人公への評価　：『気配を消すのがかなり上手』

『十六夜　里緒』年齢：１６歳　身長：１６５ｃｍ　体重：？？？　バスト：Ｆ

翠の親友で生徒会書記

成績は常に上位クラスで弓道部の期待のエース

しかし、他の運動は平均以下（胸が邪魔してうまく動けない）

黒眼黒髪で眼鏡っ子　髪を左右に三つ編みにしてる

本人は胸が大きいことに困っている

こちらも不良に絡まれているところを光に助けられ、光に惚れている

奥手で、誰かがいると積極的になれず、光と二人っきりの時は緊張してうまく喋れない

本人は何とかしようと思っている

周りの人の評価　：『萌え！（男子）／あの胸、羨ましい（女子）』

主人公の評化　：『ときどき、黒いオーラを出すのをやめて欲しい』

主人公への評価　：『色々と助けてもらってます』

登場人物紹介　ｐａｒｔ　１（後書き）

亀更新ですがよろしくお願いします。

異世界に着いて…

刹那　ｓｉｄｅ

魔法陣らしきものに飛ばされ、気がつくと、何所か石の上で倒れていました。

私たち以外の人が周りにいるようなので、気付かれない様に現在進行形で気配を探っているところです。

沙織たちは…全員倒れたままですが、どうやら無事のようです。

その周りのは…人数は５０人ぐらい、隙があまりないので『素人』ということはありませんね。

その中で一番存在感が強く、周りの人に守られるように立っているの人が私達を召喚したのでしょうか？

目を閉じたままだとここまでが限界ですね。

まさか、不良の闇討ち対策に習得したこのスキルがこんな風に役に立つとは…。

おや、光がもうすぐ起きるようです。

向こうが攻撃する姿勢を見せないので、このままにしておきますか。

「ん…。　ここは…。　おい、みんな起きろ！」

そう言い、みんなを揺すり起こそうとする光。

…もうちょっと、周りを確認しましょうよ。

「痛っっ…」　「ここは…」

紅と翠がほぼ同時に目を起きました。

さすが、双子（？）。

性格は似ても似つきませんけどね。

三人起きたので、そろそろ私も起きますか。

「あれ？　何で私も…。

沙織、大丈夫ですか？」

「お兄さん？　うん、何とか」

「ふみゅ～。　どうなったの？」

「たしか、生徒会室にいたら体が透けて言って…」

「気が付いたらここに…、くっ、不覚だ」

みなさん、案外落ち着いてますね。

「そうだ、『異世界召喚』だよ！　『異世界召喚』！
俺達、異世界に来たんだよ！！」

『うるさい！　紅！！』

ドカッ！！

訂正、バカが一人はしゃいでます。

周りの人たちが若干、引いてますよ。

まあ、お蔭で状況把握はよくできましたが。

周りの人のほとんどが中世ヨーロッパの鎧みたいなものを着ているので、十中八九で兵士でしょう。

兵士は５２人いて、そのうちの２人がかなりのやり手。

そして、存在感が一番強い人は私達と同じ年くらいの女の子で、巫

女服（？）を着ています。

ここを抜け出すのは…不可能ですね。

出口は一つで、そこにあの二人の兵士がいますので、八人全員が抜け出す事は出来ません。

ここはおとなしくしておきますか。

？？？　ｓｉｄｅ

ハァッ　ハァッ

『召喚魔法』による異世界からの勇者様の召喚、なんとか成功させました。

私の魔力の９割以上が使われているので、失敗したらもう後がなかったのでとても不安でした。

これは私達の最後の希望なのですから…。

そろそろ、勇者様たちが目覚められたようですね。

あれ？　一人、二人、三人、四、五、六、七、…八人！

七人だけ召喚するつもりが、八人も召喚していまいました！！
ど、ど、どうしましょう。　ま、まずはおちついて。

スー　ハー　スー　ハー

えっと、勇者様は7人必要で、目の前にいるのは8人。
…何も問題ないじゃないですか！　と言うより、むしろこれでこの国の勝利に一歩近ずきました！！
勇者様たちも全員目が覚めたようなので、この国を救ってくれるように『お願い』いますか。

刹那　side

さっきから巫女服を着ている人の顔がコロコロと変わっています。
多分、原因は私でしょうかね。
ただ、最後は『人を道具のように使う』人の顔になっていましたね。

そのために光達を呼んだんでしょうけどね…。
さて、私はどう動きましょうか…。

「ようこそ、いらっしゃいました。　勇者様」

「君は？　って、勇者様ってどういうこと？」

光はいい具合に混乱してますね。
…さっきから隣の紅（バカ）は目を輝かせていますけど。

「申し遅れました。

私はファイ国、第二王女　エレカ・アイン・ツバァンツィッヒ・ファイです。」

「王女様！？」

エレカ「はい。　そして貴方達には魔王を倒す勇者となって、この国を救ってほしいのです。」

（「テンプレ　キタ━━━（゜∀゜）━━━！！」）

（「ちょっと黙っていてください」）

（「あの～。　刹那さん？
その右手に持っているものは何かな？って。　ストップ、ストップ。　ギャ～～」）

みんなにばれない様にスタンガン（不良対策用）で気絶させたので、これで静かになります。

「魔王…ですか？」

「はい、実は……」

話が長いので簡潔にまとめると

・この世界は『アヴァロン』、向こうの世界は『ガイア』と呼ばれている。

・この『アヴァロン』には東側に位置する人間が治める『ファイ国』、南側にある獣人族領の『ミュー国』、西側の龍族領の『エータ国』、中央のギルド本部がある『アルファ国』そして北側の魔族が支配する『グザイ国』の５つの国がある

・それぞれの国とは

獣人族　（ミュー国）　　：同盟関係

龍族　　（エータ国）＋　ギルド（アルファ国）：相互不可侵

魔族　　（グザイ国）　　：戦争中

・現在、魔族が優勢で人間、獣人族の連合軍がやや押されている。

・時の巫女姫と言う人が

『異界より救世主が現れ　7人の勇者が現れん

異界より現れし勇者は国と連なりし者と共に魔と戦ふ

異界より来たりし7人の者が魔王に戦いを挑み　人、獣と魔族との戦は終わる

そして勇者は二振りの剣で邪な者を切り裂き　この世に平和をもたらさん』

という予言を出したので、私達を召喚した。

「なので、勇者様を7人だけ召喚するつもりだったのですが…」

申し訳なさそうに、喋る第二王女。

…今が、発言のチャンス。

「あ、すみません。　たぶん、巻き込まれたのは私ですね」

そう言い、私は自分から手を挙げる。

「えっ！？　それは本当ですか？」

そして、展開についていけず、少し混乱気味になる王女様。

「はい。根拠は三つあります。

一つは、他の7人は勉学や運動に特化していることです」

「それは…」

「訂正、（光を指差して）その両方が得意な人もいました」

紅は…まだ気絶していますね。

「そして二つ目、この7人は前日に不思議な夢を見ています。

恐らく、それが召喚される前兆だったのでしょう」

「あ〜〜」　「確かに」

頷く、夢と蓮花　。

他の４人も気になっていたらしく、黙ったままだ。

「三つ目。　この理由が一番強いのですが、魔法陣が7人を中心にしていたことです。

多分、召喚されている途中で沙織に触れたので、一緒に連れてこられたのでしょう」

『……』

場の空気が静かになっていく。　皆、私が『イレギュラー』だと分かったのでしょう。

「それで…王女様？」

「は、はい」

「私は向こうの世界に帰った方がいいのでしょうか？」

『！？』

「ご自身で帰る方法をお持ちですか？」

「いえ、私達の世界には『魔法』は一般的ではないので、自力では無理ですね」

「……すみません。『召喚魔法』はあるのですが、『送還魔法』は…ないのです」

「ええっ！」　「そんな…」

驚く夢と、落胆の声をあげる沙織。

そして、半ば予想していたような顔をする翠と里緒。

ま、これは私も予想通りです。

「本当にすみません」

そう言うと深々と頭を下げる第二王女。

再び場に沈黙が戻り、他の兵士も私達と顔を合わせないようにしている。

そして、この空気を破ったのは…

「頭を上げて下さい」

「えっ…」

光だ。

光は元の世界に帰れないと分かったのに、その目には絶望の色は無かった。

「まだ、帰れないと決まったわけではないですし、それに…」

そして、にっこりと笑い…

「困っている人を前に見過ごすわけにはいきませんから」

「ゆ、勇者様……／／／／」

（「おとしましたね」）（「おとしちゃいましたね」）（「おとしすぎだ」）（「また…ですか」）（「お姫様までも…」）（「またライバルが増えちゃった」）（「……（一人、気絶中）」）

異世界に来ても光のフラグメーカーは健在です。

せっかくのシリアスも、これでは台無しですね。

「みんなもいいか？」

そんな事、聞くだけ無駄ですよ。

「ふぅっ。　仕方ないからてつだってあ・げ・る（翠）」

「わ、私も…（里緒）」

「光が行くなら……／／（蓮華）」

「もちろんだよ（夢）」

この光ＬＯＶＥの４人が断るなんて考えられませんよ。

「こんな面白いこと、おまえらだけにやらせてたまるか」

あれっ？　いつ、紅は復活したのでしょう？

今度から紅には１０万？ではなく、３０万？の方を使いますか。

「私もいいけど…兄さんはどうするの？」

そう言うと、どこか不安そうに見つめてくる沙織。

どうするかって、そんなものここに来る前から決めていましたよ。

「仕方ありませんから、もう少しだけ付き合ってあげますよ」

「さすが、刹那。　話の分かる奴♪」

「あ、ありがとうございます。

それでは案内しますから付いてきて下さい」

そう言うと、城の中を案内し始める王女様。

（「さて、私という『イレギュラー』がどういう風にこの世界に影響を与えるか…」）

今から、少し楽しみです。

向こうの世界と同じように退屈させないで下さいよ。

召還されて…（前書き）

前回までのあらすじ

・異世界に到着

・なんかこの国に協力することに！？

・現在移動中

召還されて…

刹那ｓｉｄｅ

現在、無駄に長い廊下を移動中…。

かれこれ5分はあるいていますね、これ。

「王女様、これから何処にいくのですか？」

「勇者様にあった武器を探すために、この城の宝物庫へ向かっております。

それと…『王女様』ではなく『エレカ』とお呼び下さい」

「え…でも」

光と王女様がなにか言い合っていますが、後半はスルーします。

それにしても宝物庫ですか。

一体、この人たちはどんな武器を選ぶのでしょう。

光は聖剣でしょうか？　ま、とんでもない武器なのは確かでしょう。

「ここが宝物庫の入口です」

立ち止まると、目の前にはいかにも豪華そうな扉が。

王女様はその扉の取っ手を思いっきり引っ張った。

ギギギッ……

「この扉の取っ手に触れますと、対侵入者用のトラップが発動しますので、扉に触れない様にお入りください」

「は、はい」

そして、中へ入っていく勇者7人。　と見送る私。

「セツナ…様？」

「はい、何でしょうか？」

「セツナ様もどうぞ中へお入り下さい」

「私もいいのですか？」

「はい、自分の身を守れる武器があった方がいいでしょう？」

（副音声：「武器が良ければ自分の身ぐらい守れるでしょう？」）

「…分かりました」

そう言い、扉の中へ足を踏み入れた。

光　ｓｉｄｅ

宝物庫の中へ入り、周りは暗闇で最初は何も見えなかったが、徐々に目が慣れていった。

そして周りを見渡すとそこには、いかにも強そうな鎧や神秘的な盾など、様々な物が置いてあった。

そして、その中を迷わずに進んでいる自分がいる。

まるで何かへ引き寄せられているみたいに。

そして気が付けば、目の前には二振りの剣がある。

一つは黄金で、もう一つは白銀の剣だ。

そして、それぞれが支えあうように置いてある。

そっと触れてみると、金属特有の冷たさとどこか温かいようなぬく

もりを感じる。

今度は一気に両方の剣を持ってみる。

最初は重いと思ったけど、段々と体の底から力が溢れる様な感じがして、今は丁度いいくらいの重さに感じる。

『この剣なら自分の命を託せる』そう思えてきた。

刹那ｓｉｄｅ

宝物庫…ですか。

一見、すごい武器がたくさんあるようですが、宝石がガラスだったり、観賞用の剣があったりしています。

光達が贋作を選…ぶ事はありえませんね。

なんたって、主人公補正持ちパーティーですから。

だから、私は私の武器を探すことにしますか。

斧…重すぎです。　私が扱えるわけがありません。

盾…盾ごと敵に吹き飛ばされます。

剣…宝石類がたくさんあって、１００％観賞用です。　強度も青銅の方が数倍マシです。

何かの像…もはや武器でもありません。

ピコピコハンマー…何であるのかスルーします。

なかなか私に会う武器がありませんね。

この際、手ぶらで帰っても…。

不意に一本の剣に目が止まる。

いや、それは剣と言うには細くて、反りがある…刀だ。

何で、この世界に刀があるのだろうかと疑問に思いながら、それを手に取る。

その瞬間、

セカイが変わった。

気が付くと自分は真っ白な空間の中に立っていた。

比喩ではなく、本当に真っ白なのだ。　上も下も、その境が分からないくらいに。

その空間の中に自分ともう一人、１２歳くらいの少女がいる。

銀色の長い髪を自分の身長位まで伸ばし、目の色は紅くキリッとしていて美少女の部類に入ります。

…自分の周りの美人、美少女率が高い気がしますが、気にしません。

たとえ、少女の着ている服が黒いゴスロリだったっとしても。

「汝（なんじ）が一妾の新たな『使い手』かの？」

唐突に話しかけてくるゴスロリ少女。

『使い手』？……。

「あなたはあの刀…ですか？　それと、ここは何所でしょう？」

「うむ、正確には妾は『刀に宿る精霊』と呼ばれるものじゃ。

そして、ここは汝の『精神世界』と呼んでおくかの。

それで、汝が妾の新たな『使い手』になるのか、ならないのか？」

『刀に宿る精霊』…『付喪神』の事でしょうか。

『付喪神』が宿るものは駄刀のわけがありませんよね。

「はい、私があなたの『使い手』になります」

「ふむ、ちと頼りなさそうじゃが、まあいい」

「人を見かけで判断するものではありませんよ」

「…確かに。汝の魔力と気の量はそこそこあるの」

「どれくらいですか？」

「魔力は宮廷魔術師レベル、気の量も一流剣士並にあるぞ。

って、汝は自分の事なのにしらなかったのか？」

「はい、なにぶん、この世界に来たばかりですから」

そう言い、私はこれまでの経緯を『刀に宿る精霊』に話した。

「汝も苦労しておるようじゃの。

どれ、妾が汝のために一肌脱いでやろうかの」

「…何故？」

「ん？」

「何故、そこまでしてくれるのですか？」

「それは、汝が妾の『使い手』だか…」

「ダウト　それではあなたに得がありません。

世の中には、損得勘定抜きで行動する人もいますが、少なくともあなたはそういうタイプではない。

違いますか？」

二人の間に沈黙が流れる。

「くっくっくっ　なかなか、頭の回る小僧じゃ。

まあ、強いて言えば、『汝がやろうとしている事に興味がある』からかの。

それだけでは、不満かの？」

「…いえ、これからもよろしくお願いします」

「うむ、こちらこそじゃ」

「そういえば、自己紹介がまだでしたね。

私の名前は『白亜　刹那』です。

あなたの名前は？」

「…ない。　妾が意識を持ち始めたのは、この蔵に来てからじゃからの。

自分で付けようかと思うたが、やはり…の」

「分かりました。それでは、私が付けましょう」

「本当かの！？」

「いつまでも、『刀に宿る精霊』だけでは何かと不便ですからね」

さて、どんな名前を付けましょうか。

「『ファイ国』の宝物庫であったので、『フィー』というのはどうでしょう？」

「うむ、『フィー』か気に入ったぞ。

それにしても、出会った場所を掛けるとはの」

「いいじゃないですか」

「いやいや、責めているわけではない。

それに、さっきも言ったろう『気にいった』と」

「そうでしたね。

それでは改めて、これからもよろしくお願いします、フィー」

「うむ、こちらこそじゃ、刹那」

そうして私は現実世界に戻っていった。

武器を選んで…（前書き）

前回までのあらすじ

・宝物庫に到着

・相棒をゲット

武器を選んで…

前回までのあらすじ

・宝物庫に到着

・相棒をゲット

刹那ｓｉｄｅ

あの後、宝物庫の前までに戻ってみると、すでに全員が自分の武器を持って見せ合っていました。

誰がどの武器を選んだか簡単にまとめると

光…金と銀の双剣

紅…赤い手甲

沙織…白と黒の双銃

夢…自分より大きい大剣

翠…碧い宝石付きの杖

蓮花…野太刀

里緒…少し光っている弓

みんなのイメージとぴったりの得物ですね。

「刹那はその黒い刀か？」

ん？　紅が言った言葉が頭の中で引っかかる。

黒い？

暗闇で気付かなかったけど改めて見ると、柄も鞘も真っ黒だ。

「はい。　そうですよ」

「ふ～ん、意外だな。

刹那なら銃を選んで、背後から魔王を狙い撃つと思ってたのに」

「…あなたが私をどういう風に思っているか、よくわかりました」

ま、否定はしませんけどね。

「皆さんの武器はそれでよろしいのですか？」

『はい！』

見事なシンクロ率ですね。

（（「刹那、なんじゃあいつらは！！」））

（（「どうかしましたか？」））

頭の中を響くような感覚で、フィーの声が聞こえてくる。

これは、『念話（テレパス）』という魔法を改造したものらしく、触れている人限定だが、盗聴される心配がなく、魔力の消費も比較的少ない優れもの。

わざわざ、このような方法で話し合っているのはフィーというアドバンテージを他の人、　王女様に知られるよりも、黙っていたほうが色々と（暗躍が）やりやすそうだからである。

（（「あやつらの魔力や気がありえないくらいに多いぞ。

本当に人間か？」））

（（「……さあ？　『実は神様の子孫でした』と言われてのおかしくありませんね」））

（（「その認識もどうかと思うのじゃが」））

「本日は最後にの皆さんの魔力と気を調査します。

調査と言ってもそれ用の水晶に手を触れるだけですので、ご安心ください」

そう言い、今度はすぐ近くの扉に案内する第二王女様。

その部屋の中を覗いて見ると、そこにはハンドボールくらいの水晶とローブを被った人が7人いた。

最初は私達を見て少し驚いたみたいだけど、すぐに平静に戻る。

…

（（「フィー、今誰にもばれない様に魔法を使えますか？」））

（（「まあ、多少の事なら。　どうしたじゃ、急に」））

（（「実は……というわけです」））

（（「ふむ、仮にもしそうだとしたら、とても妾では無理じゃな」））

（（「そうですか」））

（（「して、どうするのじゃ？」））

（（「なに、何とかしてみせますよ」））

ま、今から対策を練っておきますか。

「この水晶に触れると魔力と気、魔法素質が分かります」

「魔法…素質？」

オウム返しに反応する光。

「魔法素質とはその人が使える魔法の種類の事です。

例えば、私だと『探索』『空間』『加護』と3種類あります。

大抵の人は一つで、二つある人は珍しいですね」

（（「ちなみにお主は『火』『氷』『風』『土』『水』『雷』の六対と『光』『闇』の二極、『時間』『空間』の二天が使えるぞ」））

（（「…面倒事の予感がしてくるので、何とかあの水晶を誤魔化せませんか？」））

（（「それくらいなら大丈夫じゃ。

今は、刹那の精神世界にいるのじゃ。

時間があればできるぞ」））

（（「お願いします、最低でも『光、闇、時間、空間』は隠し通して下さい」））

（（「任せておけ」））

さて、私も頑張りますか

エレスｓｉｄｅ

『異世界の勇者様』

もし予言が本当なら、たった7人で戦局を覆すほどの力の持っている人。

魔法を使った事がないと聞きますが、恐らく魔力や気の量が多いとは思っていましたが、　凄過ぎです！

特に光様、魔力はこの国一番の魔法使いの約5倍、気の量も我が国の騎士団長の約5倍。

刹那様でさえも、光様の５分の１くらいはあります。

異世界人は皆、このように多いのでしょうか？

皆さまの能力を簡潔にまとめますと

	魔力	気
光	49872	51236
紅	803	81250
沙織	31758	3
夢	24666	25
翠	78686	33
蓮花	5203	6
里緒	58212	1

刹那		100000
0000		
	（平均）	50
50		
（ファイ国のトップ）	9997	10002

刹那さんの結果があまりに綺麗で一番驚いたのは余談です。

次に魔法素質ですが、

光　…『光』『聖』『浄化』

紅　…『火』『破壊』

沙織…『水』『治癒』『酸化』

夢　…『土』『強化』

翠　…『氷』『停止』

蓮花…『風』『空渡（そらわたり）』

里緒…『雷』『貫通』

刹那…『火』『氷』『風』『土』『水』『雷』

光様もすごいですが、刹那様は規格外です。
『六対』がそろっているなら、全体の魔法の半分ぐらいを覚えることができます。
やはり、刹那様を引きとめて正解でした。
でも、刹那様と沙織様、この部屋に入ってからずっと話し合っていましたが、いったい何を話していたのでしょう？
光様がずっと二人の事を見ていて…。
ハッ。　今はそんなことよりも…、『あれ』をどうするかです。
一人、人数が増えましたが…計画は続行します。
すみません、勇者様方。
「それでは皆さんの能力も分かりましたので、本日は最後に皆さんに『精霊の儀式』を行いたいと思います」
「…『精霊の儀式』？」
「はい、我が国だけの特別な魔法です」
「…そうですか」

それだけ言うと、少し考え込む刹那様。

ふふ、どれだけ考えようが魔法に関する知識が無いのなら無意味ですよ。

「はい。　それでは、私がｓ…」

「光は王女様にやってもらったらどうです？」

ここで、刹那様からの突然の提案。

「えっ！」

「わ、私は…」

「まあ、まあ、遠慮なさらずに。

それに、王女様は『加護』の魔法が使えるみたいですし」

そう言って、私にだけに分かるようにウインクをしてみせる。

まあ、確かに嬉しいですけど…。

ハッ。　何を考えていたのでしょう！

気が付いたら、既に並び終わっている勇者様方。

クッ、こうなったらこのまま。

『汝に我が願いを込める

汝、この国のため大いなる力を振るう

その力、この国に祝福をもたらさん

『契約（コントラクト・ワード）の言葉』』

そう唱えると、勇者様方が光で包まれていく。

成功…ですか？

「…別段、変わったことはないけど」

「そうですね」

「これで、いいのですか？」

光様、刹那様、沙織様の順に帰ってくる感想。

一瞬、思考が停止するも直ぐに活動を開始させる。

「ハ、ハイ。　そうです」

（（「おかしい。　確かに魔法は発動したはずなのに。

何で『暗示魔法』がかからないの！？」））

そう、この『精霊の儀式』実は勇者の力の矛先がこの国に向かない様するため、『暗示魔法』をかけるためのものだったのだ。

エレス自身は『暗示魔法』が使えないから光がかかることはないが、他の７人の魔法使いはこの国精鋭の『暗示魔法』の使い手だ。

それなのに、誰もかからないなんて…。

（（「異世界の勇者には『暗示魔法』がかからないの！？」））

その時、エレスは気付かなかった。

刹那の瞳が怪しく光っていたことを。

武器を選んで…（後書き）

ちょっと、中途半端に終わってしまいました。

なるべく早く、次を投稿します。

武器を選んで…（裏）（前書き）

前回までのあふらすじ

・自分の能力の把握

・王女様の計画阻止

武器を選んで…（裏）

ｓｉｄｅ　刹那

（（「フィー、さっきの魔法は…」））

（（「うむ。間違いなく『暗示魔法』じゃ。分かり難くする為に詠唱を変えているが、精霊である妾（わらわ）には分かる」））

第二王女（エレス）様に代わり、メイドさんにこの城に用意された自分たちの部屋に案内される間、フィーと『精霊の儀式』について、（心の中で）話し合っていた。

（（「ま、たった７，８人で戦局を変えられる奴をすぐに信じるような奴の気も知れませんが。

私としてはこうしてくれた方が、遠慮なく行動できていいですけどね」））

最初から、遠慮なんかする気はありませんけどね。

（（「そういえば、刹那よ。どうして、奴ら（光達）は『暗示魔法』を受けても無事なのじゃ？

魔法の「ま」の字も知らんかった奴らが『抵抗（レジスト）』したとは思えないのじゃが」）））

（（「『抵抗（レジスト）』？　…ああっ、抗魔法の魔法のことでしょうか。　それなら、違いますよ。

光は王女様がしたので『暗示魔法』はありません。

次に沙織…私の妹ですが、みなさんが水晶で能力を測っている間に、私が先に一暗示を掛けておきました（・・・

（（「私も自分自身に暗示…いわゆる自己暗示というやつで、魔法が効かなかったという訳です」））

（（「なるほど…。　しかし、それだけで『抵抗（レジスト）』できるものなのか？」））

（（「もし、『暗示魔法』が相手の脳に直接、命令をお送る魔法なら先に、自分の脳を満タンになるように埋めてしまえばいいと思ったんです」））

（（「…それだけの根拠でよく、『任せろ』と言ったの」））

（（「他に方法がありませんでしたからね」））

そうこう言ってる（？）間に目的地に到着したようです。

「こちらの8部屋が皆さまの寝室で、おトイレはあちらです。

今日は、皆さまはお疲れになっていると思いますので、自由におくつろぎになって下さい。

食事の時間になりましたら、私どもが迎えに上がります。

もし、何か御用がおありでしたら、お部屋に付いてるベルを鳴らして下さい。

私どものうち、手の空いている者が駆けつけますので。

それでは私は城の掃除をしてきますので、これにて」

そう言うと、もと来た道を帰っていくメイドさん。

「リアルメイドすげぇ～。　ああ、あの人の掃除姿みてみてぇ～」

「うるさい、紅。　それと、あなたのは掃除違いですよ」

「はっ？　それって、どういう…」

「それでは、また明日」

「おい、ちょっ…」

紅が何か言っていますが、無視して一番近くの部屋に入る。

すると、そこには超高級ホテルより豪華な家具や何かが置いてあった。

窓から入ってくる茜色の陽から判断して、地球の時間帯で5時半くらいだと予想をつけておく。

よく、こんな部屋を8人分用意したものです。

それより、何時私の部屋を用意したのでしょうか？

ま、気にするだけ時間の無駄ですね。

そこまで、考えるとベットの上に寝転がる。

（（「さて、これからどのような企みが見れるか楽しみですな、勇者様」））

（（「茶化さないで下さい。　それに、私が出来る事など限られてますよ」））

（（「何、いざとなったら城の人間全員に暗示でも掛けてやればいいのじゃ」））

（（「そんなに簡単に言わないで下さい。

それに、暗示は特性上親しい人間か、冷静さを失った人にしか使えませんよ」））

（（「そうだったのか？」））

（（「はい。　私の方法では、相手に自分の言葉を信じてもらわないといけないので、初めての人にはあまり効果が無いんですよ。

それに、簡単な暗示を一回掛けるだけでも１０分はかかりますよ」））

（（「なるほど…。　ん？

刹那、それだとどうやって勇者ら7人に暗示を掛けたのじゃ？

能力を測ってから、３０分で向こうは魔法をかけてきたのじゃから、計算が合わんぞ。

刹那の計算だと、最低８…７０分は必要じゃぞ？」））

（（「ああ、それなら簡単です。

紅には『この世界で頑張れば、ハーレムを作れるかもしれませんよ』と、

沙織以外の女子には『もしかしたら異世界召喚がきっかけで、光とより親密に、彼女になれるかもしれませんよ』と耳元で言ったら、勝手に脳の中が満タンになりましたので」））

（（「？」））

（（「つまり、あいつ等は妄想させることで、脳の中が満タンになったという訳です。

だから、魔法が効かなかったという訳です」））

（（「そ、そんな方法で…」））

（（「フィー、この事は深く考えてはいけません」））

深く考えるだけ、無駄というものですよ。

（（「わ、分かった」））

（（「よろしい。
それでは、これからですがフィーの事はまだ秘密にしておきたいので、他の人にばれない様に行動して下さい」））
（（「うむ、心得た」））
（（「私は、とりあえず力をつけなくてはいけませんね。
ま、今日はとりあえずくつろいでおきますよ」））
（（「そうか、妾は眠っておるから用があれば刀を持って念じろ」））
（（「分かりました、それでは」））

フィーとの会話が終わると、目を閉じ、これから起こるであろう事に対する策を考える。

とりあえずは、向こうも策が失敗したので、暫くは様子見…でしょうか？

となると…。

その様子を刀の中ら見ている者が一人。

（「刹那よ。　せいぜい妾を楽しませてくれよ。

なに、安心しろ。　その間だけは、刹那の言葉に従ってやるからの」）

そう独り言を呟くと、静かに眠りにつくのであった。、

武器を選んで…（裏）（後書き）

前回の種明かしです。

後、更新遅れてすいません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6607l/

イレギュラーな勇者様

2011年5月8日16時42分発行